【三重】心不全管理アプリを開発、患者の自己管理と適切な受診を支援する-土肥薫・三重大学大学院医学系研究科循環器・腎臓内科学教授に聞く◆Vol.2

2023年7月21日 (金)配信 m3.com地域版

2022年10月に開設された三重大学医学部附属病院「脳卒中・心臓病等総合支援センター」は循環器病患者の包括的支援活動を開始し、事業が採択された2022年6月からの10か月弱で延べ900人以上の相談に対応した。患者支援の一環として循環器・腎臓病内科学講座が開発した心不全管理アプリも注目される。三重大学大学院医学系研究科循環器・腎臓内科学教授の土肥薫氏に聞いた。（2023年6月7日インタビュー、計2回連載の2回目）

▼第1回はこちら

――三重大学医学部附属病院「脳卒中・心臓病等総合支援センター」のホームページを見ると、リハビリテーションの普及・啓発に注力されているように感じます。

その通りです。特に心臓病に関しては、回復期や維持期のリハビリテーションを提供する病院、診療所はまだ限られています。心臓のリハビリテーションを知っている患者さんも少ないと思います。どこに行けば、リハビリテーションを受けていただけるのかを情報提供するのは当センターの大きな役割であり、百崎良副センター長（リハビリテーション部教授）がこの部分をマネジメントしています。

土肥薫氏

近年の多くの研究で、心臓リハビリテーションは薬物療法と同等かそれ以上の生命予後やQOLの改善効果があることが分かってきました。薬の場合は非常に多くの選択肢があって一括りで効果を語ることはできませんが、リハビリテーションは標準的な方法で行えば効果が期待できます。

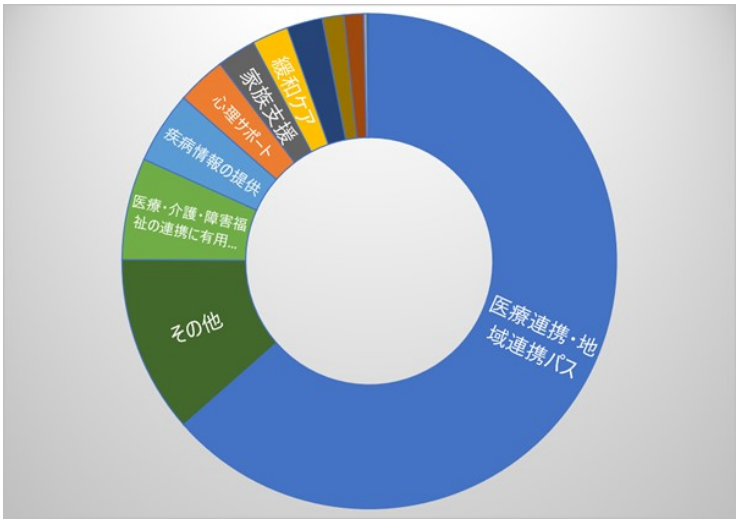
脳卒中や心臓病の予後改善は患者さん自身の自己管理が非常に重要なファクターです。私の印象ですが、リハビリテーションを積極的に受ける方は、食事や血圧、服薬の管理もしっかりされると感じます。医療機関側もリハビリテーションを行う際に、自己管理の知識や方法を指導していることが多いのです。また、医療機関でのリハビリテーションが終了した後、それに準じるような運動を自己管理で継続してもらうことが大事です。まず、患者さん自身に「リハビリテーション」という考え方を持ってもらうという観点から普及啓発に力を入れています。

――同センターホームページに連携医療機関として県内25病院の名前が掲載されていますが、これはどのような役割の病院ですか。

各地域で循環器病医療の中核となっている病院です。今後、これらの病院と連携して情報共有や研修会などを実施していきたいと思っています。また、脳卒中・心臓病のかかりつけ医機能や在宅医療、リハビリテーションを提供できると手を挙げていただいた各地域の医療機関リストも掲載しています。まだ作成途上であり、掲載している地域も限られていますし、各医療機関の機能をどこまで載せていくかなど、検討課題もあります。

――開設からこれまでの相談実績を教えてください。

センター事業が採択された2022年6月から2023年3月の10カ月弱で支援を行った延べ患者数は934人です。多いのはやはり医療連携に関する相談ですが、心理的サポート、就業・学業との両立支援、疾患情報の提供、福祉、経済的問題、家族問題などさまざまな相談がありました。



三重大学医学部附属病院 脳卒中・心臓病等総合支援センターの支援内容（支援総数1337件、1患者への複数支援含む）

――県内の医療機関はどんな形で脳卒中・心臓病等相談支援センターを活用すればよいでしょうか。

何か困りごとを抱えている脳卒中・心臓病の患者さんがおられるようなら、当センターに相談するように伝えていただければ、解決のヒントを差し上げられると思います。現在、各地域の医師会などと情報交換を行っているところですが、今後、医療機関向けの研修会などが企画された際には、ぜひ、ご参加ください。

――三重大学循環器・腎臓病内科学講座が中心となって進めてきた三重県の循環器医療の研究について聞かせてください。

急性心筋梗塞に関しては、三重県内の多数の施設が参加したレジストリを構築して分析することにより、救急搬送と予後との関係などを明らかにしてきました。レジストリから得られた知見を救急体制の改善や治療法のアップデートに生かそうとしています。2022年度から、心臓血管外科と連携して急性大動脈解離など急性大動脈症候群のレジストリを開始しました。今後もレジストリ研究で蓄積したデータを行政に還元するという活動を継続していきます。

急増する心不全患者への対応という部分では、循環器・腎臓病内科学講座がスマートフォンの心不全管理アプリを開発しました。患者さんの自己管理を支援すること、増悪時に適切なタイミングで医療機関を受診することの2つを狙いに開発しました。

――開発した心不全管理アプリの概要を教えてください。

心不全患者さんがスマートフォンに毎日、血圧、脈拍、体重、症状などを入力し、自己管理するアプリで「ハートサイン」という名称です。入力データから心不全の増悪リスクのスコアが算出され、増悪リスクが高いと判断すると自動的に「医療機関の受診」をお勧めするメッセージが表示されます。データのグラフ表示機能、かかりつけ医や家族の連絡先表示、服薬リマインド機能など多彩な機能も付いています。冒頭で話した医療DXの進展を見越して、PHRとの連携、医療機関や家族へのデータ送信などへ発展させることも考慮して作り込んでいるところです。

現在、臨床研究として50～60人ほどの患者さんに利用していただいており、使い勝手はどうか、心不全の自己管理や再発予防に有用であるかなどを検証しています。使い勝手やシステムトラブルの面では特に問題無いという結果が出ており、臨床研究を一気に広範囲の多数の症例に広げて行う準備を進めています。

――心不全はほとんどが高齢の患者さんになると思いますが、本人が使うのですか。

「ハートサイン」は普通のスマートフォンだけでなく、高齢者向けスマホでも使用可能です。超高齢社会ですから、今後、高齢者や障害を持つ人向けにさらに使いやすい端末は出てくると思っています。

まだ臨床研究の途中ですが、従来、使用していた血圧手帳などの方法に比べると、使用率はかなり高いのではないかという感触を得ています。日々の自己管理によって、患者さん本人やご家族が増悪のサインに気付き、早めに受診してかかりつけ医の指導を受け、さらに自己管理を徹底するという良いサイクルを回すことが目的です。

将来、「ハートサイン」が普及しても、かかりつけ医の先生方に監視機能を求めるわけではありません。従来通り、治療と自己管理の指導という役割を果たしていただければよいのですが、日々の血圧、体重などのデータがあればより診療しやすくなりますし、オンライン診療にも有用ではないかと考えています。臨床研究を進めるとともに、当院の脳卒中・心臓病等総合支援センターでも、この心不全管理アプリの普及活動を進めていきたいと思っています。

◆土肥 薫（どひ・かおる）氏

1994年三重大学医学部卒業後、同附属病院内科研修医、市立伊勢総合病院勤務を経て、三重大学医学部附属病院循環器内科医員。2002年から米国University of Pittsburghに留学。2020年7月から三重大学大学院医学系研究科 循環器内科・腎臓内科学 教授を務める。自身の研究テーマは「心臓超音波を中心とした非侵襲的画像診断の臨床応用」「心不全の病態解明と治療」。

【取材・文・撮影＝大迫拓志】

➜ **三重県に関する他のニュースを見る**

三重県　滋賀県　京都府　大阪府　兵庫県　奈良県　和歌山県

三重県に関連するニュース

新型コロナ:新型コロナ　患者数増１６．８３人　病床使用３０．３％　１７～２３日定点　／三重
7月26日

名張市立病院:移行は決定後２年以内　名張市立病院改革、検討中の経営形態で　／三重
7月21日

新型コロナ:新型コロナ　１０～１６日患者数　定点当たり１５．５３人　前週比増　／三重
7月20日

名張市立病院:名張市立病院職員へのアンケ結果を公表　よくする会　／三重
7月19日

【三重】循環器病に関わる全診療科が参加して「脳卒中・心臓病等総合支援センター」を開設-土肥薫・三重大学大学院医学系研究…
7月14日

記事検索　ニュース・医療維新を検索